

学会長 基調講演

大会1日目 9月2日(土) 11:00~11:30 ホール

分科と包括の視座を保つ

講師 甲田 宗嗣

広島都市学園大学 (第31回中国ブロック理学療法士学会 学会長)

学歴

広島県立保健福祉短期大学 卒業 (平成11年)、放送大学教養学部発達と教育専攻 卒業 (平成13年)、広島大学大学院保健学研究科博士課程後期保健学専攻 修了 (平成19年)

職歴

赤穂市民病院 理学療法士 (平成11~13年)、広島県立保健福祉大学 助手・県立広島大学 助教 (平成13~19年)、広島市総合リハビリテーションセンター・広島市立リハビリテーション病院 理学療法士 (平成20~27年)、広島都市学園大学 准教授 (平成27年~現在)

社会活動

公益社団法人広島県理学療法士会 常任理事 (平成23~27年)、公益社団法人広島県理学療法士会 副会長 (平成27年~現在)、公益社団法人日本理学療法士協会 代議員 (平成22年~現在)、日本理学療法士学会精神・心理領域理学療法部門 運営幹事 (平成22年~現在)、日本神経理学療法学会 運営幹事 (平成25年~現在)

取得資格等

専門理学療法士 (神経、教育、運動器、基礎)、博士 (保健学)、専門健康心理士、呼吸療法認定士

分科と包括の視座を保つ



甲田 宗嗣

広島都市学園大学 (第31回中国ブロック理学療法士学会 学会長)

分科と包括と聞くと何を想像するだろうか？また、これら2つの言葉の関係性をどのように感じるだろうか？

多くの理学療法士は分科学会と地域包括ケアの単語を連想するのではないだろうか。私たちの業界において分科と包括という単語が単独で使われることは少ないが、ここでは、分科とは分科学会のように専門的に分かれて学術活動や臨床業務を行うこと、包括とは地域包括ケアシステム構築のための連携や協業を促進することと定義する。

学会テーマを「分科と包括」に決めるにあたり、学会役員で分科と包括の認識に関するアンケートを行った。対象は第30回中国ブロック理学療法士学会と第21回広島県理学療法士学会の参加者100人とした。それによると、「分科していくことは必要か」との問いに対し、約7割が必要と回答した。「包括化していくことは必要か」との問いに対しても約7割が必要と回答した。また、「分科と包括のバランスを保つことは難しいか」との問いに対し、約5割が難しいと回答し、約4割がどちらでもないと回答した。これらのことから主な意見として、分科や包括化を推進することは必要と感じながらも、バランスを保って研鑽することの難しさを感じる人が少なくないと推察された。

また、このアンケートの自由記述では、分科と包括の定義が不明確なので回答できないなどの意見が少数あったが、それでも、分科と包括化していくことに対して不安や危惧することがあるかとの問いに対する自由記述では、分科で54人、包括化で42人が何らかの不安や危惧する内容を記載した。さらに対象者の属性と分科と包括の認識について分析を進めたところ、最終学歴との間に興味深い関連が認められた。

学会長基調講演では、この分科と包括の認識に関するアンケートを始め、広島県理学療法士会における学術活動の変遷、地域包括ケアの現状、新人理学療法士のキャリア形成に対する認識などのデータを提示し、分科と包括の視座をバランスよく保つための心構えについて検討する。